

1. 新型コロナウイルス感染症流行下におけるクリニカルクラクシップのオンライン導入の試みと課題

獨協医科大学 総合診療医学

鈴木有大, 志水太郎

【目的】新型コロナウイルス感染症の流行に伴い、当学でも臨床実習の制限が生じている。2021年時点でも罹患、濃厚接触者に該当することによる実習の制限が発生している。このような状況で、参加型臨床実習を継続することと学習機会の喪失を防ぐ目的に当科ではいくつかの試みを行った。その中で、初診外来実況中継と Hybrid-Flexible 型授業に関する取り組みについて報告する。

【方法】初診外来実況中継は、許諾を得ることができた患者に対して医師、医学生が診療状況を、ビデオ会議アプリを用いて別室で教員が医学生に解説と質疑応答をする形式の実習である。聴診・触診はできないが、問診・視診を共有できる。専用のパソコンと Web カメラ、マイクを準備する必要がある。Hybrid-Flexible 型授業は、学習者がオンラインでも対面でも受講できる形式の授業を指す。Post CC OSCE に準じた医療面接と診療録作成を行う演習などを題材にしている。この形式は、対面とオンライン参加者両者の反応に対応するためには教員の準備と技術が求められるが、感染症の流行状況に応じて臨機応変に受講形式を変更できるメリットがある。各取り組みについて医学生にアンケートを実施して、利点や改善点等を分析した。

【結果】初診外来実況中継では、実際の患者に対する問診の意図の理解が進むことや皮膚所見の共有がオンラインで出来ることが評価された。一方、患者の声量、声質により聞き取りが難しいという改善点があった。Hybrid-Flexible 型授業は、参加者同士で顔が見えることに対してプライバシーへの配慮を求める改善点があった。

【考察】臨床実習のオンライン導入は、教員と設備の準備や負担が増えるが、感染症の流行状況による学習の機会損失を避けることができる可能性が示唆された。一方、音声やプライバシーなどオンライン特有の改善点が指摘された。

2. 私たちの倫理観～フィクションとファクトから学ぶ移植医療より～

獨協医科大学

¹⁾ 医学部1年, ²⁾ 基盤教育部門,

³⁾ 語学・人文教育部門, ⁴⁾ 第二外科学

小齊平幸奈¹⁾, 木暮紘子¹⁾, 河野未来¹⁾, 島野竜綺¹⁾, 奥田竜也²⁾, 廣田美玲³⁾, 磯 幸博⁴⁾

【目的】今回私たちは、医師としての基本的な資質・能力として身に付けることが求められている倫理観や死生観がどのようなものか、また、医学生がこれらを身に付けるためにどうあるべきかを見出すことを目的とした。

【方法】まず人文自然選択Ⅰ「フィクションとファクトから学ぶ移植医療Ⅰ」を受講し、文学作品『わたしを離さないで』を通じたフィクションからの学びとドナー経験者と移植外科医からのファクトに基づく学びを通じ、フィクションとファクトの両側面から移植医療に纏わる倫理観や死生観を学んだ。更に、PBL 形式で調査、再考するとともに議論を深めた。

【結果と考察】『わたしを離さないで』では、俗世とは隔絶された施設で移植用の臓器を確保するためだけにクローン人間の子供達が育てられ、それが黙認されているという倫理的に問題のある異様な世界が描かれており、フィクションを通じた学びからは私たちの倫理観の在り方を改めて尋ねられているように感じた。ファクトに基づく授業からは、移植医療の現状を学ぶとともに、生体臓器移植では本来人の命を救うための医療が健康な人の命を脅かす可能性があること、移植医療ではレシピエントのみならずドナーにも配慮が必要なことを学んだ。更なる議論の中で、仮に私たちが倫理について考えることを止めてしまった時、『わたしを離さないで』で描かれているような世界が簡単に現実のものになってしまうのではないかという気付きがあった。また、患者、家族、医療者など医療に関わるそれぞれの立場や環境で考え方や感じ方は異なってくることを改めて実感した。

【結論】私たちの倫理観は一言で言い表すことは難しく、環境によっても倫理観や死生観は変化しうるのではないかと考えるに至った。医師として求められるそれぞれの環境に適した倫理観や死生観を身に付けるためには、私たち一人一人が医学生のうちからしっかりと様々な経験を積み、考えていく必要があると考えられる。